

NUFS&NUAS 読書コメント大賞

受賞作品

最優秀賞

『音楽』三島由紀夫著

なんだかうまくいかない。トラブルだらけ。八方塞がり。だけれどなんとかしたい。人の為になることは結局は、自分の為になっている？そんなモヤモヤがついてまわる。精神科医の主人公は患者に傾倒しすぎるべきではないと自制しているつもりだったが、いつのまにか一人の患者に夢中になって、翻弄されてしまう。彼女を治すのは僕だけだ。僕だけに頼ってほしい。それは既に一つの愛情なのかもしれない。尽くすことが、自分自身の欲望になっていく。複雑だけど僕らにも通ずる感情がある。

(最優秀賞 やまねたくみ)



図書館長賞

『ユリゴコロ』沼田まほかる著

人間の本当の優しさって優しくなんてない、そう思った。愛情があるからこそ、それはまるで鋭い棘のように心に刺さる。狂気を帯びた衝動的な告白文から物語は始まり、愛へと帰結する。運命という歯車に絡まる人間の「内」が緻密かつ繊細に描かれており、私はその美しさと切なさに心が震えた。私たちに
とって大切なものとは何か、私は「ユリゴコロ」について考えたくなった。

(図書館長賞 灯)

『ツバキ文具店』小川糸著

しおれた紫陽花を綺麗だと感じられるか、感じられないか。人生には、しおれた紫陽花の様に、人間関係や仕事等で上手くいかない時期が多くある。その時期を無駄だと思うか、貴重であると捉えるかでは、人生に大きな差が出てくる。

そして、この本は人生において無駄な事は何一つないのだと私に教えてくれた。今の場所から一歩踏み出し、新たな場所へ挑戦する勇気をくれた、そんな暖かい本である。

(図書館長賞 きむ)

『ままならないからあなたと』

朝井リョウ著

ままならないってどういう意味だっけ、と手に取った本にこんなにも考えさせられるとは思ってなかった。性格が正反対の2人が小学生から大人になるまで成長する間の友情関係を描いた物語。価値感の違いが引き起こしたゾワッとする結末に、こうなる運命だったとしか思えず、自分の信じてきたものは正しいのかを問われている気がした。人生ってままならない...

(出版会賞 かせ)



『蜜蜂と遠雷』恩田陸著

野球は一点でも多い方が勝ち。マラソンは一番速かった人が勝ち。では「音楽」は？コンクールという明確な答えの無い舞台上、ピアノと全力で向き合う天才達の数日間。才能を持っていて当たり前の世界でゴールの無い場所を目指していく姿に、ただひたすらに圧倒されました。活字の中にピアノが見えて音が聞こえる、間違いなくこの大学生活4年間の中で1番面白い小説です。素晴らしいコンクールでした。

(出版会賞 長谷部真莉奈)



『クワイエットルームにようこそ』

松尾スズキ著

【忠告】この本を決して笑ってはいけない場所で読まないでください。

薬の過剰摂取で精神病院の閉鎖病棟に担ぎ込まれてしまった女性、明日香が「正常」と「異常」の狭間で過ごした14日間。文学というよりもはや文字で書かれた漫画。とてもテンポよく読めました。ラストはしんみりと、スッキリした気分になりました。たった140ページとは思えない満足感が味わえる傑作です。

(奨励賞 図星のカービィ)

『萩原朔太郎詩集』

三好達治(選)

学校が終わって、駅から家までの、街灯にかすかに照らされた暗い帰り道。一人旅で出かけた人気のない静かな町の空。この本から、そんな情景が思い浮かびました。詩集なので、最後のページから読みはじめたり、ぱっと適当にひらいたページを読んでみるのも自由です。読み終わった後のこのころをばなになにとへん。

(奨励賞 船戸舞依子)

『コンビニ人間』村田沙耶香

私は今、上手に「人間」ができているだろうか？誰もが周りの目を気にしながら生きている。そして、世界は異物を嫌い、排除し、修復しようとする。社会、仕事、友達、大人・子どもの世界に確かに存在する残酷ともいえる仕組み。私達は常に普通であることを求められているし、求めている。この本の主人公は普通ではない。いつのまにか「常識」「普通」を学び育った私はそう思う。主人公は最後まで、普通にはなれなかったが、「私はコンビニ店員という動物なんです」という言葉は清しく、力強く、羨ましささえ感じた。この本にはいろいろ考えさせられたが一番思ったことは「人間ってめんどくせー」

(奨励賞 きじむな～)

『去年の冬、きみと別れ』

中村文則著

2人のモデルの女性を焼き殺したとして死刑判決を受けた天才写真家、木原坂の小説を書くため、「僕」は取材を開始する。ストーリーは「僕」視点で進み、家庭環境、写真への没頭、錯乱した精神など、木原坂が異常犯罪者である証拠資料が散りばめられている。しかし最後まで読んでこの本のトリックに気付いた時、190ページ程の本に隠された数え切れないほどの伏線とその回収に衝撃を受けるにちがいません。

(奨励賞 ひろ)

『夜のピクニック』恩田陸著

高校生がただ1日中歩き続けるだけの学校行事「夜行祭」では、登場人物一人一人が様々な想いを抱いて前に進み続けていた。まるで高校生のはっきりしない想いを大人が描いているようで、大学生になった今読んでさらに心に響いた。もうあの頃に戻って、高校生のように感じることはできないけれど、大人になっていくにつれてまた違うように感じられるのも悪くない。

(奨励賞 高井臯)